セザルコトヲ約ス）

第三　朝鮮海峡ノ自由交通ヲ危クスルカ如キ軍事的設備ハ朝鮮沿岸ニ一切之ヲ為サヾルベキ旨ノ相互保證

第三　朝鮮海峡交通ノ完全ナル自由ヲ危クスルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ為サヾルベキ旨ノ相互協約（又ハ日本ハ朝鮮海峡交通ノ完全ナル自由ヲ危クスルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ為サヾルコトヲ約ス）

第四　政治上工業上及商業上ノ関係ニ就テハ露西亞ハ日本ニ亦ハ朝鮮ニ於ケル自由行動並ニ朝鮮ヲシテ善良ナル政府ノ義務ヲ盡サシムル為メニ助言及援助ニ依リ朝鮮ヲ助クルノ専権ヲ以テスルコト但シ右ハ内乱其他之ニ類シテ朝鮮ト日本トノ平和的関係ヲ乱スノ恐アル事変ノ鎮定スル為メニ必要ナル範圍内ノ軍事的援助ヲモ包含スルモノトス

第四　露西亞ハ日本ニ亦ハ朝鮮ニ於テ行動ノ自由ヲ有スルコト且又日本ハ露西亞ト協議シタル援軍獨リ助言ヲ以テ朝鮮ヲ助ケ以テ内ノ義務ヲ盡サシムルコトニ就キ主張スル權利ヲ有スルコト但シ右ハ内乱其他内テ朝鮮ト日本トノ平和的関係ヲ乱スノ恐アル事変ヲ鎮定スル為メニ必要ノ限度ニ於ケル軍事的援助ノ包含スルモノトス

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

第五　従来ノ協定ハ此ノ協和ニ依リテ凡テ消滅スルコト

第五　日本ハ前條（第四條）ニ規定シタル場合ニ際シ必要欠クベカラザル兵數ノ外ハ之ヲ派遣セザルコト且又派遣隊ニ於テ使命ヲ果シタルトキハ直ニ之ヲ召還スベキコトヲ約ス

又露西亞ノ國境ニ沿ヒテ之ニ接近シタル地帶ノ區域ヲ豫ノ明確ニ議定シ置キ日本軍隊ニ於テハ決シテ其ノ境界ヲ超ユベキコトヲ約定ス

第六　日本ハ支那帝國ノ領土中露西亞ノ國境ニ接スル部分ニ於テハ露西亞ノ主權ヲ侵サン權利ヲ承認シ且該地方ニ於テハ一切露西亞ノ行動ヲ妨害セザルコトヲ約ス

第七　従来ノ協定ハ本協定ニ依リテ凡テ消滅スルコト

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

第四拾壱號

伊藤侯爵より桂内閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月十七日於伯林発電

只今ラムスドルフ伯約束ノ書翰ニ接セリ聖彼得斯堡出発ニ先タチ余ハ彼ト私人的對談ノ結果ト認メ得ベキモノヽ摘要書ヲ伯ニ渡シ彼ノ承認ヲ促ガシ置ケリ其ノ摘要書ハ如左

摘要書全文略之

右摘要書ニ對シ露西亞ノ著眼点ヨリシテ提議シタル修正案ヲ

(イ) 第一点ニハ変更ナシ

(ロ) 第二点ニハ ラムスドルフ伯ハ「相互保證」ノ後ニ拓殖弧ヲ設ケテ「又ハ日本ハ云々ヲ約スル」ノ一句ヲ挿入セリ伯ハ又「互ニ」ノ一句ヲ刪除セリ

(ハ) 第三条　朝鮮海峡交通ノ完全ナル自由ノ危害スルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ為サヾルベキ旨ノ相互協約（又ハ日本ハ朝鮮海峡交通ノ完全ナル自由ヲ危害スルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ為サヾルコトヲ約ス）

(ニ) 第四条　露西亜ハ日本ニ義務スルニ尤ノ事項ヲ以テス即チ工業上及商業上ノ関係ニ就テハ日本ハ朝鮮ニ於テ行動ノ自由ヲ有スルコト且又日本ハ清ノ露西亜ト協議シタル援軍獨ニ助言ヲ以テ朝鮮ヲ助ケ以テ凡ソ善良ナル政府ト属スル義務ヲ盡サシムルコトニ就キ主優ナル權利ヲ有スルコト但シ右ハ内乱其ノ他凡テ朝鮮ト日本トノ平和的関係ヲ乱スノ恐アル事変ヲ鎮定スル為メニ必要ノ限度ニ於ケル軍事的援助ヲ包含スルモノトス

社ノ外ラムスドルフ伯ハ新ニ尤ノ二条ヲ加ヘタリ

(ホ) 第五条　日本ハ前條ニ規定シタル場合ニ際シ必要欠ノベカラザル兵數ノ外ハ之ヲ派遣セザルコト且又派遣隊ニ於テ使命ヲ果シタルトキハ直ニ之ヲ召還スベキコトヲ約ス

又露西亜ノ国境ニ沿テ之ニ接近シタル地帯ノ區域ヲ清ノ明確ニ講定シ置キ日本軍隊ニ於テハ決シテ其ノ境界ヲ越ヘザルベキコトヲ約定ス

(ヘ) 第六条　日本ハ支那帝国ノ領土中露西亜ノ国境ニ接スル部分ニ於テハ露西亜ノ主優ナル權利ヲ承認シ且該他方ニ於テハ一切露西亜ノ行動自由ヲ妨害セザルコトヲ約ス

(ト) 第案第五条ニハ変更ナク露西亜案ノ第七条トナリテ存ズ

ラムスドルフ伯ハ曰ク初メノ三条ハ毫モ変更スル所ナシト、第四条中伯ハ獨立ノ原則ヲ毀傷スルノ恐アリトシテ「政治上ノ」語ヲ刪除シタリ伯ハ又清ノ露西亜ト協議スベキ旨ノ原則ヲ提議シタリ第六條ニ関シテハ伯ハ五ヲ以テ千八百九十八年西男爵マリロゼン男爵ニ交付シタル覚書及千九百年聖彼得斯

僅ニ於テハ村氏ノ提議シタル所ニ依リテ承認セラレタル原則ニ外ナラズト論ズ

余ノ意見ニ依レバ第四條ニ掲ケタル原則ト協議スルノ原則ヲ加フルコトハ不同意ナリ第五條ノ末文ハ相互的ノモノトナサバ可カラズ即チ他國ノ軍隊モ亦タ朝鮮國境附近ニ来ラザルコトヲ以テ該條ニ同意スルノ必要條件トナスベキ旨ヲ附加セザルベカラズ又第六條ハ茫漠ニシテ廣義ニ失スル然レドモ余ノ見ル所ニ依レバ日本政府ニシテ毫ダ商議ニ着手セバ是等ノ細目ハ日本ニ満足ナル様協定シ得ベシト確信スラムスドルフ伯ハ余ノ意見次第ニテ該草案ヲ基礎トシテ東京ニ於テ両政府間ノ正式商議ヲ開クベキコトヲ申述ベタリ

彼ハ又該案ハ皇帝ノ裁可ト内閣ノ同意ヲ経タリトスベシ、右ニ對シ余ハ第四條ノ修正第六條ノ文意其他細目ニ関シ多少ノ時日ヲ費シテ熟慮スルニアラザレバ余ノ私見ヲ明カニ表白スルコト能ハザル旨

迂信セントス其間ニ貴下ノ熟慮ヲ切望スルモノアリ即チ今回ノ機會ヲ逸シ余ノ今日マデ往復シタル旨信ヲ遽断セバ或ハ恐ル好様ノ再来迄キニアラザルベキコトヲ之レナリ若シ之ニ反シ余ニ望ミニ右旨信ヲ進續スルコトヲ以テスルトナラバ貴下ハ他ノ方面ニ於テ之ガ為メ必要ナル保留ヲ為サバ可カラズ、余ハ貴下ノ迂電ヲ待望ス、本電敷ヲ元老ニ示サヨ、余ハ十二月十七日ブラッセルニ向テ出発ス

西於参郷

伊藤侯爵より杉村在露臨時代理公使充電敷

明治三十四年十二月十七日於伯林発電

金八只今ラムスドルフ伯ノ書翰ヲ受取リタレ共今タブラヲルスニ向テ出発スヘキ旨当地より伯ニ返翰ヲ送ル能ハズ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

第四拾四號

伊藤侯爵より林在英公使宛電報

明治三十四年十二月十七日 於伯林発電

英政府ト商議ノ現狀ヲブラゼンスニ於テ余ニ報知セラレヨ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

第四拾五號

林在英公使より伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十七日午後一時倫敦発電

今日午後七時五分ブラウセン着電

十二月十八日ブラウセン到着ノ際松方代理公使より接受

該問題ハ十二月十九日ノ閣議ニ上レンベシ十二月二十日迄答ニ接スル豫期ス

第四拾六號

林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月二十一日ブラッセルスニ於テ接電

内閣會議ノ後ランスダウン侯ハ別條第一ハ外交文書ノ交換ニ依リテ之ヲ規定シタル方得策ナルベキコトヲ述ヘ別條第三ハ協議ノ上多少文字ヲ改メ協約ノ序文中ニ之ヲ挿入スベキコトヲ提議シタリ如斯ナル事項ニ関シテハ英国政府ハ断然別條第二ニ反對ナリ

小官ハ日本政府ニ右ノ提議ヲ電報シタリ

第四拾七號

桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十一日ブラフヒルニ於テ接電

本電報ハ暗號ニ不明ノ箇所アリ飜譯ノ上不完全ナルヲ免レズ

譯者註

十二月十七日伯林発貴電ヲ受領セリ（此処必ズ明）利害衝突ノ恐アル点ニ就キ露西亞ト現在ノ協商ニ比シテ一層好良ナル協和ヲ永サンガ為メニ貴下ガ敏腕ヲ以テ盡カサレタルマトニ對シ本官ハ最モ衷誠ナル感佩ノ意ヲ表スルモノナリ本官ハ本問題ニ関スル貴下ノ希望ニ對シテ切ニ同情ヲ寄セカノ及ブ限リ貴下ノ幹旋ノ進行ヲ助クルコトニ勉ムベシ、尤本他ノ一方ニ於テ本官ノ記臆セザルベカラザルモノアルヲ即チ満州問題ノ危期ニ迫ラントスル以来我ガ政

策ノ方針ニ依リテ帝國ハ終ニ諸外國ニ對シテ責務ヲ負フニ至リ
タルコトヲ之レヨリ而シテ此責務タルヤ帝國ノ信義ヲ重ズル上ニ
於テ全然無視スルコト能ハザルモノナリ殺政策ハ閣下ノ内閣ノ
時ニ始マリ本官ノ試實ニ其ノ方針ヲ継ヲ即チ以テ明カニ
本官ニ亦其良策ナルコトヲ確信スルノ証タルニ過キズ全然事
局ノ現状ヲ明カニシ且本官ノ難シトスル点ヲ詳ニセントスレバ先ヅ
本問題ノ沿革ニ就テ閣下ノ注意ヲ乞フノ必要アリ閣下ハ
記臆セラルヽナラン本年二月當時係屬中ノ滿洲商議ニ関シ
日本政府ハ嚴然支那ニ警告シ若シ彼ニ於テ各列國ト別
約ヲ締結シ以テ各國ニ與フルニ專有的若ハ特別的ノ領土上
若ハ經濟上ノ優益ヲ以テスルコトアラバ是レ即チ清國領土ノ保全
ニ大ナル危害ヲ加フルモノナリト論シ然リ而シテ日本政府ノ
起案ニ基キ大不列顛獨逸北米合衆國伊太利及墺地利

匈牙利ノ諸國モ亦支那ニ對シテ同樣ノ警告ヲナシ而シテ如斯キ
聯合行動ノ結果トシテ當時本官ハ事中ノ滿洲條約ハ終ニ失
敗ニ帰シタリ本官モ亦此政策ヲ遂行シテ現時ノ滿洲商
議ニ関シ（此ノ所不明）支那ニ忠告スル他國ト共同シテ動作スル
場合ハ免ニ角然ラザレバ決シテ他國條約上ノ權利ヲ傷ケ又ハ
清國ノ主權ヲ毀損スルノ恐アル協定ヲ為スベカラザルコトヲ以テセ
ノ然リ而シテ英米兩國政府モ亦帝國ノ建言ニ基キテ同樣ノ
忠告ヲ為シタリ此聯合忠告モ亦商議ノ進行ニ大ナル影響
ヲ及セリ加之日本政府ハ屢々明白ニ且無條件ニ斯言シテ曰ク
支那領土ノ保全及同帝國ニ於ケル均等ノ機會ハ帝國ノ原則
的主義ナリト而シテ此主義タルヤ帝國ノ加盟シタル英獨
協商ノ基礎ヲ成スモノナリ獨逸ハ露羅ノ解釋ニ基キ
滿洲ヲ以テ該協商ノ範圍外ニ置キタルモ日本ハ彼ト同一

轍ニ出ル能ハサルナリ蓋シ帝國政府ハ其ノ見ル所ニ依レハ滿洲ハ該協商ノ範圍外ニ在リト明言シタレバナリ故ニ假令ヒ同盟國ノ全然度外ニ置テ論セシト若シ帝國ニシテ朝鮮ニ於ケル露國ノ讓歩ニ敦ヒンガ為メ彼ト締結スルニ滿洲ニ關シテ帝國過去ノ態度ト一致セザル協定ヲスルコトアラバ之レ即チ帝國ノ威嚴ヲ損シ支那ノ信用ヲ失ヒ併セテ從来帝國ノ主唱シタル主義ノ忠實ニ維持スル諸外國ニ信用ヲ失フ所以ナリトス露西亞ノ又對提案第五條ハ帝國過去ノ態度ト一致セザルハ勿論ラムスドルフ伯ハ該條ヲ以テ千八百九十八年ノ西男ノ覺書及千九百年ノ小村壽太郎ノ提議ヲ以テ為ス可キ提議ニシテ原則ト同和ス ト主張スト雖モ爾来形勢ハ一変セリ而シテ日本ノ政策ハ單ニ事局ノ進行ト伴ヒタルニ過ギズ且又本官ノ以上説明ニ明カナルガ如ク日本ノ諸外國ニ對シテノ義務ヲ負フニ至リシモ亦其ノ

以後ニアリトス加之西男ノ覺書及小村壽太郎ノ提議（此必暗殺ハ於老字不明）前者ハ閣下ノ首相奉職中後者ハ山縣侯内閣ノ時ニ為シタルモノニシテ西者共ニ交互的基礎ヲシテ起案セルモノナリ喚言セバ滿洲ニ於ケル露西亞ノ位置ハ朝鮮ニ於ケル日本ノ位地ト同等ナルベキコトヲ要求セリ然ルニ今回ノ草案ハ全然右基礎ヲ無視セリ右諸觀察ニ関シテハラムスドルフ伯ニ於テハ毫モ誤解シ居ルベキノ筈ナシ本官ハ本問題ノ前陳ノ状態ニ関シ或ハ速ニ且詳細ニ閣下ノ意見ヲ本官ニ通敦セラレンコトヲ望ム如何トナレバ本官ハ本問題ニ関シ右ノ如キ所信ヲ持シ居ルヲシテ前陳貴下ノ意見ヲ附セザシテ單ニ十二月十七日附ノ貴電ノミヲ陛下ニ奏聞シ内閣若クハ元老ニ交付スルハ貴下ノ為メ不得策ニシテ切角対邦ノ為メニ斡旋セントスル労ニ對シ心外ナリト感スレバナリ故ニ本官ハ貴電ヲ本官ノ手元ニ差止メ置キ

テ傍ら速ニ貴答ニ接セントコトヲ希望ス本官ハ露西亞ト協和スルコトニ反對スル者ニアラザルコトハ貴下モ亦之ヲ知セラルヽナラン、本官ハ却テ如斯ヲ協和ノ成立ヲ眞實ニ賛成スレトモ然レトモ本官ノ考フル所ニ依レハ該協和ハ帝國ノ他國ニ對シテ負フ所ノモノト調和セザルベカラズ、上陳請求ノ貴答ニ接シタル上ニテ本官ハ露西亞ノ反對提案ノ條件ニ関シ多少意見ヲ陳述スルコトアルベシ

西於ノ歸

伊藤侯爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月二十日 ブラツセルスニ於テ発電

十二月二十日ノ貴電ニ依リテ察スルニ貴下ハ余ノ誤解セラルヽノ恐ナカラズ貴下ニシテ若シ九月十日貴卿ニ於テ対露ノ會話ヲ追想セバ朝鮮ニ関スル余ノ目的ハ其ノ現狀ヲ変シテ帝國ノ利益ヲ進メ且ツ之ニ取得スル同國政治ニ干渉スル行動ノ自由及事權ヲ以テスルニアルコトハ貴下モ記臆セラルベシ露西亞ヲシテ前陳我目的ヲ承認セシメントセバ吾モ亦幾分ノ滿洲ニ於ケル彼ノ行動ノ自由ヲ承認スルノ覺悟ナカルベカラズ、露西亞ハ其ノ占領以前ニ享有セシ行動ノ自由ヲ以テ滿足スルモノナルカ為メ又撤兵後ハ從前ニ比シテ一層多キヲ要求スルモノナルカハ實際南滿ヲ開始スルニアラザレバ之ヲ確知スルコト能ハズ、余

ノ目的トスル所ハ即チ占領以前ニ露西亞ガ該地方ニ於テ實際享有シタル自由行動並ニ撤兵後ニ至リ鉄道保護ノ処置等ノ如キ帝國ノ諾否如何ニ拘ハラズ寧隆露西亞ノ享有スルニ至ルベキ自由行動ニ限リ之ヲ同國ニ譲歩ノ的ニ承認セントスルニアリシナリ約言スレバ今ノ月的ハ交互的基礎ノ協商ニ比シテ一層日本ノ為メ利益トナルベキ状勢ヲ作可セントスルニアリテ萬已ムヲ得ザル場合ニ至テ即チ最下策トシテ交互的基礎マデ譲歩スルノ覚悟ナリキ、貴下或ハ今回露西亞提出ノ草案ヲ見テ前陳今ノ目的トスル所ト大差アルガ如ク感セラレタルナキヲ保セザレドモ歐州ニ於ケル露西亞政治上ノ必要其ノ財政ノ情況其他種々ノ事情ニ依リテ今ハ露西亞政府ヲシテ愚見ノ如ク譲歩セシムルヲ得ベシト信ズルニ至ル、然リ而シテ指示此ノ目的ヲ遂行スルニトハ敢テハ今ノ大ニ望ム所ナリトス如何トナレバ假リニ一方ニ於テ朝鮮ノ現状ヲ変更シ又ハ之ヲ維持スルコトニ関シ英國ト協和ヲ締結スルモ他ノ一方ニ於テ同一問題ニ関スル日露協商ノ運命ヲ定メザレバ毫モ帝國ニ益スル所ナカルベケレバナリ今ハ最早倫敦行ヲ延期スル能ハザルヲ以テ明後日同地ニ向テ出発スベシ

第四拾九號

伊藤侯爵より露國外務大臣宛返翰

明治三十四年十二月二十三日ブラゴエシチエンスクに於て発信

拝復十二月一日（西暦今月十四日）附尊翰、漸り今十七日午後伯林に於て落掌仕候処、前以て今日より以て同市出発の期日と定め置候次第にて終に今日迄返翰を延延せんの已いなる得ざるに至候、私者の遺憾とする処、殊に其間に於て急速の遊歴中恍忙之際事情の許す限り可成綿密に貴案を攻究致候処、隊を差上置候摘要書に対して閣下の加へられし修正、頗る宜大なるものにして、其の影響する所、多寡セントセバ先づ深く立入て研究スルの必要アルコトを御通知致かゞしを捏ずして遺憾之至に存候、乍恐右之書の拝讀にて得ざる未悉の感を不取敢閣下に敷道致候且又

貴國當路者ノ調和的意志ニ関シテハ毫モ疑ヲ挿ム必要ヲ
候得共該草案ノ條文ニハ未タ容易ニ両國間ニ永續スベキ實際
的協商ヲ締結スルノ見込ノ立タザルコトヲ告白致候閣下ノ草案第
六條ニ包含シタル露西亞ノ又對要求ハ遠大荒漠且廣漠ニ失シ
極者ヲシテ第一ニハ露政府ノ確然タル眞意ニ於テ如何ナル
方策又措置ヲ執ラントスルカヲ知ラスシテ若シ又第二ニハ露西
亞ノ勢力ヲ行使セント欲スル領土ノ確然タル區域ニ関シ確乎タル考
案ヲ抱クコト能ハザリシ候而已ナラズ先般會談ノ際極者カ明瞭ニ
考慮ヲ煩ハシテ閣下ノ確信ヲ招キ從テ閣下ト極者トノ間ニハ既決ノ
問題ナリト存居候点モ亦第四條ニ對スル閣下提出ノ修正ニ依リテ
再ヒ疑問ト成ル事候閣下ノ第四條ニ挿入セント欲セラルル豫メ協
議若クハ共同ノ原則コソ恰モ大ニ極東ノ強國ナル權衡ヲ危ク
スルモノナリトシテ極者ノ熱心ニ挫折致シタル処ニ御座候朝鮮ニ於
ケル日本專有ノ自由行動ヲ措キテ他ニ親密ナル協和ノ基礎アルヲ
見ズト論シタルハ閣下ノ御記臆ニ存ズル事ト存候然ルニ閣下ノ
草案ヲ一讀シ該案ハ恰モ新邦ヲシテ被委任者ノ地位ニ立タシメ
或ハ又両國間ニ豫メ協議シタル合意ヲ執行スル者ノ地位ニ下
ラシメントスルモノナリトノ初感ヲ抱キ候ハ極者ノ甚タ遺憾トスル
処ニ御座候一見シタル処ニテハ豫メ協議スルコトハ專有ノ自由行
動トハ互ニ相容レザル反對ノ思想ト被存候從テ第六條ニ於テハ
注意シテ此ノ自家撞着ヲ避ケンコトヲ勉メラレタルモノト認メラレ
候加之左ノ点ニ関シテモ亦閣下ノ注意ヲ促度ト存候草案ニ
依レバ露西亞ハ日本ノ自由行動ヲ特定ノ範圍ニ限リテ承認
シ而カモ之ニ関シテ第二條第三條第五條ヲ列記シタル如キ嚴重
ナル條件ヲ附セントスル次第ニ御座候然ルニ翻テ其ノ要求スル
処ヲ見レバ日本ヲシテ奠條件ニ露西亞ニ承認スルニ何事ヲ問ハ

ズ凡テ政治的權能ヲ其ノ極点マデ行使シ得ベキ自由行動ノ
權ヲ以テセシメントスルニ有之候ヲ之レニ止マラズ日本ノ活動
範圍ノ領域ハ嚴格ニ之ヲ定限シ而カモ之ニ附スルニ第五條ニ明記
スガ如キ制限的ノ條件ヲ以テシタルニ拘ハラズ露西亞ノ活動範
圍ノ領域ニ関スル規定ヲ見レバ將来伸縮自在ノ解釋ノ余
地ヲ存シタル字句ヲ用ヒテ起草致候處ニ前記ノ
初感其他ニ列挙スルノ必要ナキ諸点ハ松者ヲシテ陽下ノ
草案ヲ以テ協商條約ニ関スル將来ノ商議ノ基礎トシテ日本
政府ニ建議スルノ適否ニ就キ頗ル疑惑ヲ抱カシメ候松者ノ
見ル所ニ依レバ永續シ且ツ実行シ得ベキ協商ハ先般會談中閣
下ノ御明言ノ如ク先ツ公平ニシテ兩條約國ニ與ヘルニ殆ンド均等ノ
利益ヲ以テスルモノタラザルベカラズト存候事情如斯ニ御座候間本
草案ニ對シテ松者ノ確説ヲ表白スルニ先ケ更ニ一層周匝綿密
ナル攻究ヲ為スヲ御許容被成下度候又タ松者ノ帰途ニ相
就キ候期日モ殷々切迫致候間或ハ康京到着以前ニ毎
ニ閣下ニ書翰ヲ啓上スルノ暇モ無カルベキカト存候此義宜敷
御含被下度候尚而敬閣下ニ御教道中上度儀ハ即チ貴
國ノ有力家ハ日本ト和親協商ヲ結ビ交誼ヲ厚クセントスルノ希
望ヲ抱カルヽコトヲ確信シテ帰途ニ上ルハ松者ノ欣喜堪ヘザ
ル処ニ御座候而シテ此希望タルヤ勿論我邦ノ政治家ニ於
テモ均シク抱キ候事ト信望致候次第ニ御座候
松者ハ此ノ機會ヲ利用シ更ニ貴國ニ於テ受ケタル懇親優
遇ニ對シテ深厚ナル謝意ヲ表シ且又都合ニ依リ御親切ナル
西伯利亞旅行ノ招待ニ應ジ難ガタク頗ル貴慮ト存ル旨閣
下ヨリ内々ニテ閣下ヘ御傳言被成下度候様御依頼申上
候

終ニ臨ンテ私者ハ伯爵ニ對シテ敬意ヲ表シ申候旨言

十九日ノ一筆ニ有之ヲ以テ

侯爵　伊藤博文

ラムスドルフ伯爵閣下

桂内閣總理大臣より伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月二十八日於倫敦接電

十二月二十二日附ノ貴電ヲ見テ本官ハ大ニ安心シタリ本官ハ之ニ對シテ貴下ニ感謝ス本官ハ先キニ貴下ノ着眼点ヲ充分ニ解セザリシヲ自認セザル可カラズ朝鮮ニ関スル貴下ノ目的ハ本官之ヲ知ル迄スト雖モ閣下ハ前電報中満州ニ付テ帝國適度ニ為シ得ベキ譲歩ニ関シ毫モ説明セラルル所アカラシカラ以テ其辺ニ関シテハ朝鮮問題ノ如ク之ヲ知ル迄スルマト能ハザリシヨリ十二月十七日附貴電ニ依レバ貴下ハ露西亞ノ反對提案ニ對スル批評攻撃ヲ三点ニ限ラシ而シテ如斯ニ細目ニ関シテハ帝國ニシテ唯ダ商議ニ着手セバ満足ナル結果ヲ得ベシト論ゼラレタリ

故ニ本官ハ

第一 激ノ協議スルコトノ事則チ第四條ヲ刪除シ

第二 第五條ノ末項ヲ相互的ニ規定シ

第三 貴下ノ花漢ニシテ廣義ニ失スト評セラレタル第之條ヲ明確ニシ且其ノ適用ノ範圍ヲ制限スルニ於テハ

閣下ハ該文對提案ヲ以テ商議ノ基礎トナスコトヲ承諾セラルヽノ意ナラントト推測シタリ

本官ハ帝國ヲシテ要著ナル政策ヲ遂行シ諸外國ニ對シ信義ヲ保タシメント欲セバ滿州ニ關シテモ亦帝國ノ商議ヲシテ零ニ零有若クハ特有ノ領土上經濟上ノ利益ノ讓斷ハ之ヲ許サズ且諸外國ノ條約上ノ權利ヲ侵害シ或ハ支那ノ主權ヲ毀損スルノ條約ヲ許サズトノ大原則ニ從ハシムルコトヲ要スト信シタリ從テ本官ノ見ル所ニ依レバ露西亞ノ文對提案中前記ノ三点ヲ

変更スルモ尚ホ結局帝國ノ承諾シ得ルモノニ比スレバ頗ル差異アリトナシ該案ヲ以テ商議ノ基礎トナスコトヲ承諾スルノ責任スルハ假令不慎トスル程ニアラズトナスモ到底無益ナラント考慮シタリ右ノ事情ヲ以テ本官ガ十二月二十二日附ノ貴電ニ接シテ大ニ喜ヒタル理由ヲ了解セラルヽナラン該電報ニ依リ本官ハ一方ニハ滿州ニ就キ露ノ露西亞ニ對シテ為シ得ベキ譲歩ニ関スル貴見ヲ知悉シ他方ニハ貴下ガ露西亞ヲシテ貴見ニ同意セシメ得ルノ自信ヲ抱カルヽヲ知悉シタリ本官ハ閣下ガ露西亞ヲ説服シ遂ゲラレンコトヲ切望ス如何トナレバ露西亞ニ對シ帝國ガ為シ得ベキ適度ノ譲歩ニ関シテハ貴見ト愚見ノ間毫モ異ナル所ナケレバナリ貴下ノ斡旋其ノ功ヲ奏シタルトキハ正式ノ商議ヲ開クベシ朝鮮ニ於ケル帝國ノ要求トシテ貴下ヨリラムスドルフ伯ニ渡サレシ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

摘要書ニ記載シタル所ニ顧ミテ交互ノ原則ヲ適用スルトキハ即チ露西亞ヲシテ滿洲ヨリ撤兵スルノ已ムヲ得ザラシメ該領土ノ一部タリトモ之ヲ以テ軍略上ノ目的ノ為メニ使用スルコト能ハザラシムルニ至ルベシ約言スレバ交互ノ原則ハ滿洲ニ於ケル露西亞ノ軍事的活動ヲ以テ内乱及暴動ノ鎮定及鉄道ノ防護等ニ限定スルニ至ルベシ故ニ若シ朝鮮ニ関シテ帝國ノ為ニ誘シ得ベキ点ヲ基礎トシテ滿洲問題ノ裁決ヲ為ス場合ハ諸外國（大不列顛國ヲ除ク）ハ帝國ニ對シテ同謝スベキモノナリ

（不完）

附五拾壱号

桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月二十九日於倫敦接電

先電ノ續

閣下トラムスドルフ伯ノ間ニ討究セラレタル韓国案ニ関シ貴下ノ注意ヲ促スベキ点ハ唯メ一アルノミ即チ貴下ニシテ第一條ヲ以テ朝鮮獨立ノ相互承認ニ止ムルコトヲナシ得ベカリシナラバ本官ハ滿足シタルナラン獨立ノ相互保證ハ帝國ニ建設者位ヲ與ヘ起スルノミナラズ並ニ保證國ガ被保證國ノ國務ニ干渉スルノ特權ヲ含蓄スルモノナリ然ルニ帝國ノ政策ハ既ニ軍略上政治上ノ事項ニ関シテ露西亞ヲ朝鮮ヨリ確然排除セントスルニアリ

次ニ露西亜ノ文對提案ニ対シテ論陳スベシ ラムスドルフ伯ノ修正ハ文ヲ正當ニ解釋スルトキハ頗ル巧妙ニシテ熟慮ヲ要スベキモノナリ若シ我ガ想像ノ如ク第二條第三條ニ於テ「又ハ日本ハ」云々ヲ約スルノ語ヲ以テ相互保證ニ代ヘンノ意アリトセバ其ノ結果トシテ修正案ノ約束ハ全ク一方ニ偏シ且自業的性質ヲ帶ブルニ至リ日本ノ取得スル所ト露西亜ノ讓與スル所ハ單ニ推測ニ依リテ定マルニ反シ日本ノ讓與スル所ト露西亜ノ取得スル所ハ凡テ明記的トナンベシ勿論第四條ニ依リ露西亜ハ工業上商業上日本ノ行動ノ自由ヲ承認スル所アリト雖モ之シ必ラズシモ同樣ナル行動ノ自由ヲ露西亜ニ樣ズンモノニアラザルベシ加之同條ニ於テ「事機ヲ」「主優ナル權利」ト改メタル趣旨モ実視スベカラズ如何トナレバ所謂主優ナル權利ハ之ニ次グ同種ノ權利ノ存在ヲ指示スレバナリ然ラバ如シ日本ガ主優ナル權利ヲ行使スルニ當テハ露西亜ノ義務ヲ要シ露西亜ガ其ノ軽キ權利ヲ行使スルニ當リテハ高毛地國ノ承諾ヲ要セザルトナスモノナリ

又第五條第一項ノ趣旨ヲ以テ約束ヲ為ザンヲ得ザルニ至ラバ多カリ保留ヲ設ケ公使館領事館護衛隊ノ外ニ我鉄道ノ利益保護ノ為メニ朝鮮ニ駐在シ得ルノ金ヲ講シタル方策ナンベシ尚ホ出来得ベクンバ朝鮮鉄道ヲ東清及山海関牛莊鉄道ト連絡スルノ目的ヲ以テ南方滿州ニ臨機延長スルハ露西亜ニ於テ之ヲ妨礙セザルベキ旨約束ヲ為サシムルコト望マシ

最後ニ臨ミ本官ノ所見ニ依レバ商議ヲ開始スルニ先ケ露西亜ヲシテ其ノ大体ニ於テ我所見ニ同意セシメザルベカラズ

兎ニ角本官ハ露西亜ト商議ヲ開クニ先ケ現ニ進行中ノ大不列顛國ト商議ヲ成ルベク速ニ結了センコトヲ欲ス

印五拾貫弾

伊藤侯爵より桂内閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月三十日 於倫敦接電

十二月二十八日附貴電慥に受領せり、余は其前既に ラムスドルフ伯に返答したる伯の提議に係る要点は凡て一方に偏したるものナルコトヲ余の初感トシテ寧ろ鋭く指摘したる後余は伯に告げん に特来の劇議の基礎トシテ該草案の日本政府に建議スルノ適否に就き頗る疑惑を抱き居るを以て該案に就き余の確況を伯に通知するに先ち一層細密に之を攻究し其の為め尚ほ時日を假スの必要ある旨並に帰途に就く或は東京到着以前に再び伯に書翰を認むるの機会なきを保せざる旨を以て依て以て特来辱うし音信を継続するも或は又

之ヲ断絶スルモ我ガ意ノ如ク為シ得ン様処置シタリ余ハ本問題ノ発展ニ基キタル置クト雖モ帰朝後親ラ説明スルニアラズシテハ到底本問題ノ詳細ナル事情ヲ貴下ニ貫徹スル能ハズト信ズ余ハ来月初旬倫敦ヲ発シ巴黎ヲ経テ帰航ス

英国外相ランスダウン侯ト會見ノ記　其一

明治三十五年一月二日ランスダウン侯別墅ニ於テ

明治三十五年一月二日午前十時英国ボーウード

ランスダウン侯別墅ニ於テ都筑代理ニ依リ

外相　今日英日両国間ニ着手シタル協商ノ件ニ関シテハ充分御承

知ノ事ト信ス

侯爵　然ル所昨年八月迄ノ事ハ本国ヨリ命前ニ承知致シタリ其後閣下ハ

御旅行ノ由ニテ八月以後ノ消息ハ政府ニ到着後ニ聞知セリ而シ

テ自分ハ該協商ニ関シテハ決シテ異存ヲ挟ム譯ニハ無ク大体其

事ニ同意セシ迄唯タ自分ノ希望スル所ハ互ニ充分意思ノ疎通ヲ

謀ル事迄ニ至ラシテ誤解無カラシムル様ノ処置カシタシト存リ

外相　至極同感ナリ協定ニ先ダチ胸襟ヲ開キテ意見ノ在ル所ヲ交換

シ置クハ最モ必要ナリト信ズ

侯爵　就テハ閣下ヲ同国ニ置キ度キ事アリ那ノ今日英国ノ支那ニ

對スル方針即チ支那帝國領土ノ保全並ニ門戸開放主義ニ関シテハ自分ニ於テモ毫モ異存ナケレバ滿洲ニ於テ露國ハ既ニ鉄道ノ所有ヲ得タルニ依テ生ズル自然ノ勢力擴張ニ就キ閣下ハ如何ナル考慮ヲ抱持セラルヤヲ更ニ其擴張ニ抵抗シ得ルヤ否ヤニ疑ハシ

外相　既ニ帝國及ビモ亦タ鉄道ノ件ニ関シテハ昨年當國ト露國ノ間ニ協商成立セリ此協商ニ関シテハ政府ハ厚ク該會ノ攻撃ヲ受ケタレバ更ニ自滿洲鉄道ハ露國ノ勢力範圍内ニ當國ニ於テ既ニ承認シタル所ナリ尤モ之ハ單ニ鉄道ニ関シテノミノ事ニテ他ニ如何ナル權利モ譲ラズ又其一ツトシテ英ト独両國ト異リ何分モ露ノ國境ト滿洲トハ接觸（Berührung）シ居ルヲナレバ吾々ニ比スレバ露國ハ自然ニ多クノ利益ヲ享有シ居レリ

侯爵　近頃露國ハ清國ニ對シ撤兵條件ヲ名義ノ下ニ滿洲ニ関シテ種々ノ權利ヲ要求シツヽアリト之ニ對スル貴見如何

外相　滿洲ノ條約中二ヶ条ノ改訂ハ扨ヘキモノナリ其一ハ他國ノ條約上ノ權利ニ関シ他ハ清國ノ主權ヲ侵ケントスルモノナリ故ニ此二ヶ条ニ関シテハ日本ト提携シテ之ヲ討ヲ為シタリ然レドモ滿洲ノ為メニ露國ト開戦スルガ如キハ英國ノ為サヾル所ニシテ日本モ亦タ之ガ為メニ戦フガ如キ事ハ無カルベシト信ズ尤モ各國ノ條約上ノ權利ト各國ノ當然ノ有スル利益ハ出来ル限リ公平ニ維持シ度シ

侯爵　至極尤モナレド清國政府ノ薄弱ニシテ外部ノ勢力ニ抗スルノ力ヲ之レキト清露ノ境ニ接スルノ事実ヨリシテ彼ハ表面ハ條約ヲ公平ニ施行スルトスルモ實際ニ於テ地方官等露國ニ對シテ偏依ナル必置ヲ為スヿアラバ如何ニセヨ帝国ニヤ

外相　夫ハ最早ヤ致方無ヒト覚悟スルノ外無カルベシ尤モ滿洲問

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

題に関する日本政府の考いは如何なるものなる

侯爵　自分の豫メ貴意を悟る如く全く一私人の資格にて発見の吐露し
居る次第なれば日本政府の意思の那辺に在るや茫然自分の本国を
全く前の機会に於て利益を占むるに対し
露国が彼の方面に於て利益を占むるに対し
ては反対する迄の居るなれば如何乱れも
外相　爾来日本政府の之に関する方針変更したるが如きことはなしや
侯爵　変更は其後の事にて本国出発後に属する以て安心と知ずして居たる
方針を継続して居るなりと信ず
外相　之れ今回の協定に英国と一致して新方針の端緒を開く次第なり
従来英国は自由行動を主とし我を孤立の嘲を
蒙らしめたりと雖ども新端緒を開くに就きては議会の議に上ん
ことを要するなれども一旦之を決すれば薩分政撃をも敢て
其攻撃の如何なる方面に向て来るやは此協定に依り日本が満州に関
する英露の紛議より滋き引き入れる恐れの珍まるも英国が朝鮮に関
する日露の衝突より既に引き入れしなれば英国が朝鮮に関
定に日本を益する程英国を益せずと論起べし故に自分は其論鋒
を避ける目的を以て此案を修正せんと日下考案中なり
侯爵　朝鮮の事に関して閣下の意見を確め置き度き事あり即ち
朝鮮に関して日露協商なるものの現存し我が邦を之に為に束縛
されざるなれば今之を度外視する能はざるべし論を俟たず然るに此協商
なるや到底日本の永く満足して之を持続し能ざる所なるが故に日
露両国協商の上其協定を我が利益の為めに変更するに関
して協力同意を要かんべしと信ずれども如何にや
外相　之分貴意を解するを得ずしが日英協商と共に日露

協商ヲ設ケラルヽノ意ナルヤ

侯爵　設令ノ美カランコトヲ希望スト雖モ自分ハ決シテ英露両國ニ對シテ同時ニ擁護策（Double Guarantee）ヲ講ゼントスル意ニモアラズ又タ日露同盟ヲ主張スル次第ニモアラズ唯タ朝鮮ニ関シテ我カ利益ヲ擁護センカ為メニ日露協商ノ里程ヲ更ニ一歩進ムノ協商ヲ露國ト平和的ニ試ムルヿヲ云フノミ而シテ果ヲ奏シ平和ヲ安全ナラシムル所以ナリト信ズ

外相　大ハ聯カモ不同意無シ但シ英國カ朝鮮ニ於テ日本ニ與ヘントスルモノヲ以テ日本ハ又タ之ヲ露西亜ニ割愛スルカ如キ協商ヲ為サルヿニ於テハ英國ハ之ニ同意スル能ハズ殆ンダル限リハ毫モ異存ノアルベキ筈ナキモノトナラズ却テ英國ノ平和的目的ト附合スル次第ナリ

即チ閣下ハ両協定並行セバ平和ヲ維持スル上ニ於テ便宜トセラル、如シ之ハ當方ニ於テモ亦同意ニシテ英國ノ方針モ亦タ平和維持ノ目的ニアリトス

侯爵　勿論右ハ自分一個人ノ考ヘニシテ或ハ如斯キ場合ノ生ズルヿ無キヲ保セズト信ズルニ付キ其辺ハ御記臆ヲ乞フ

外相　成知セリ

侯爵　又タ今回ノ協定ニ関シテハ米國ハ必ラズ同意スルベク大統領ルーズヴェルト氏ノ考モ亦タ此辺ニ在ルカ如シト雖モ獨リノミニ對スル方針ハ如何アルベキカ元来今回ノ件ニ関シテ獨リハ初メ多少吾々ニ勧メタルカ如キ形跡無キニアラザリシモ其後ノ態度ハ如何ニ露佛ニ傾キテ千八百九拾五年ノ態度ヲ再演セバ日本ハ頓ニ同却スルナシト信ズ

外相　米國ハ無論吾々ニ同意ナラン獨リハ初メ貴國ヨリ或ハ國ト衝突スル場合ニ於テハ如何ナル態度ヲ取ルカトノ問ニ對シ好意

ノ中立ノ字ヲ一方ニ佛國ノ側聖時スル自ラ答ヘタル由ナレバ如何ニ
モ不審ニ思ヒレ故當方ヨリ直接ニ閣令セメンニ嚴正中立ノ字ヲ
ノ從テ一方ノ為メニ他ノ一方ヲ拒ムガ如キ不英カンベキ旨ノ答アリタ
リ要スルニ彼ノ態度ハ明確ナラザレ共今日ノ政羅ニ於ケル從ノ地位
ヨリ推測スレバ必ズ自由行動ノ希望スベキヲ以テ到底此同盟
ニ加入スル望ハ無キモノト信ズ尤保日英同盟ニ調和的協定ノ成
立スル事ニ関シテハ初メヨリ同情ヲ表シタル事故心配ハ無アルベシ

侯爵　國ハ然ランカ

外相　日英協商ノ條項中其日本政府自ラ提出シタル第二条ニ関
シテハ當方ニ於テハ勿論東洋ニ於ケル英國ノ海軍力ヲ他國ニ比シ
テ為ラシムル無キノ希望ハ充分抱キ居リ且又其準備モ充分
致シ居ル尼海軍力ノ配置ニ関シテ他國ト未得的協定ヲ為スハ

海軍部内ニ於テ絶對的反對スル所ナルヲ以テ今考案中ナリ

侯爵　自分ニ於テモ東洋ニ於ケル英國ノ海軍力ヲ他國ニ比シテ減ナスル
ガ如キハ英國ノ勢力維持上甚シキ不利益ナルヲ以テ決シテ貴國ノ為
サバル所ナベキヲ信シ居リ且又閣下ノ言ヲ聞キテ平生ノ所信ヲ益
々強クスル所ナルガ故ニ右ノ協約ノ必要即チアルヤト云フヲ解セザル尼
元来此協商ハ現ハ両國政府間ニ係属中ノ事柄ナルノミ
ニシテ此同盟ノ如キハ自分ノ深ク了解セザル所ナレバ無見ヲ吐露
スル能ハザルヲ遺憾トス

外相　仰ハ充分ヲ了解セリ

侯爵　今翻ノ東洋ニ於ケル英國ノ位地ニ関シ思慮ヲ深クスベシ是ハ攻撃ト
感セラレ易キ心事ナリ又タ他意アリテ日英協商ニ反対スル
分ノ考ヲ閣下ニ陳ベレバ英國ハ從前ニ比シ更ニ一層奮発セヲ力ヲ東

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

洋ニ集注セラレシニ非ラザレバ既往ニ於ケル威厳ヲ維持スル能ハザルベシト
信ズ露國ノ漸進シテ東洋ニ於ケル威厳ノ日ニ加ハルハ亦知セラ
ルベシ今日ノ状況ヲ以テ往年ニ比スレバ如何ぞ安政七年露國ガ
對馬ニ兵ヲ上陸シタル時ノ如キ英國ハ露ニ迫リテ二十四時間内ニ撤退
ヲ余儀ナクセラルヤ又ケ八百八十四年英國ハ巨文島ヲ占領シタルニアラ
ラザルヤ而シテ如斯キ既往ノ威厳ヲ挽回ニ保持セントスルニ須ラク
今日ニ比シテ一層活潑ナル態度ヲ取リ行動ヲ為スノ必要アリト
信ズ
外相 尤ナリ然ルニ現今ハ南亜戦事ノ為メニ欧州挙ゲテ戦化
ノ勢力ヲ集注シ居レバ他ノ方面ニハ成ル可ク他國ト衝突ヲ避ケン
トスルノ傾向アルモ亦已ムヲ得ザルベシ
立ヨリ報告ニ接シタル右ノ次第ハ一時間ノ後ニ
ヤ

第四節

英國外相ランスダウン侯ト會見ノ記　其二

明治三十五年一月六日　英國外務省ニ於テ

明治三十五年一月六日午後三時半伊藤侯爵都筑馨六氏ト共ニ英國外務
大臣ランスダウン侯ヲ外務省ニ訪問セラル本日ノ會見ハ外相ノ希望ニ基キ
モノニシテ其旨林公使ヨリ通知アリタレバ侯爵ハ自ラ外務省ニ赴カレ都
筑氏ノ通譯ニ依リ外相ト左ノ談話アリタリ

外相　明日ハ急ニ帰ル筈ナルカ

侯爵　然リ

外相　帰朝前ニ尚ホ何事カ帰途有之度キ事ハ無キヤ

都筑氏　伊藤侯ハ閣下ヨリ何カ帰途ニ有度様感ジ居ラレタルカ如
シ

外相　自分ハ唯タ或ハ侯爵カ何カ先日ノ帰途ニ就テ尚ホ要ヲ感ジ居ラレタルカト信ジタルノミナラズ帰朝ノ時日モ切迫シ居ル事
ナレバ帰国後ノ上親ラ細別シ度カリシナリ

侵寇　先日ノ談話ニ関シテハ更ニ要ラウ陳述スルヲ要セシ所ノ為ノ為
メ申セバ朝鮮ノ問題ハ〳〵朝鮮ニ関シテハ列国中日露両国ノ如ク
利害ノ関係ヲ直接ニ感ズルモノナシ一ハ懸ケ隔テ海峡ヲ
距テ隔ツ特ニ日本ノ如キハ數萬ノ人民モ移住シ経済上ノ関係モ亦
最モ密接ナリ然ルニ今日ハ日露両国政治上對峙ノ住地ヲ以テ之ハ
對峙ヲ生ジ引カウ生ンガ故ニ場合ニ依リテハ衝突ノ恐ナシトセズ然レバ邦
ニ於テハ政治上今一歩ヲ進メ対外権利ヲ伸張スル必要アリト信ズ
外相　過日モ日露協商ナルモノアリテ今日之ヲ度外視スル能ハザル趣ヲ
以テ聖ノ御考ハ其協商ヲ政治上ニ於テ日本ノ利益ノ為
メニ変更スルヲ望マルルモノ如シ
侵寇　然リ今日ニ於テハ日露両国共ニ朝鮮ニ對シテハ政治上對峙
ノ勢力ヲ有シ居ルガ故ニ朝鮮ニシテ獨立文明国ノ実力ヲ果タ

サズン場合ニ於テハ両国聚ツテ助言若クハ援助ヲ與フルヲ惜ンヤウ如
斯キ状態ニテハ両助言者間ニ衝突ヲ招クノ恐ナキカラズ故ニ願クハ朝鮮
ニ對スル助言若クハ援助等ハ日本ニ於テ之ヲ為スヲト定メ度シ
外相　露西亜ハ之ヲ承諾スルトト信ゼラルルカ
侵寇　其ハ実際ニ協商ニ訴ムルニ非ラザレバ確答致シ難シ然レ共露西
亜モ日本ト衝突スルヲ望マザルハ自分ノ信ズル所ナリ尤モ露政府ハ
於テモ朝鮮海峡ニ関シテハ頗ル重ヲ置キ居ル様ナレ共其交通ノ自由
ヲ日本ガ認ムル以上ハ敢テ承諾スルナラン カ
外相　其ハ平時ノ場合ニ於テハ然ルヲ得ザル
ベシ
侵寇　然リ平時ニ於テ日本ガ海峡ノ自由交通ヲ承認スレバ露国ハ已ニ
既ニ朝鮮ニ於ケル日本ノ経済的関係ノ最モ重大ナルヲ認識セルガ故ニ

其富強の結果なる利益保護の為メに必要なる必置の亂逆セザルを期スベキ況ンや日本に露国に對して朝鮮に関する政治上の特権を得しバトテ決して朝鮮の獨立の毀傷スルが如き希望を有セザルに於テオヤ

外相　右の問題は今回露京駐在中に多少の協議を為アリシヤ

侯爵　唯だ東洋一般に関スル事は彼此の間に之を流り約束セザリシ

[illegible]

於テハ日本の Predominance を認メ且ツ朝鮮と露国が朝鮮に於ハ毫も異レトノ証言は今回ノミナラズ東京出発前既に屢々聞キ得タル所ナリ

外相　果して眞ならば東洋の為メ實に賀スベキナリ

侯爵　然リ

外相　今回の日英帰国の件に就き尚ホ一言し度き事アリ朝鮮に於テハ日本の利益は Predominance を明記スルに対し英国の利益は富国強兵の攻撃も些かうがるべしと信ずるが故に目下其攻撃像防策を自ら熟慮考案中なり揚子江沿岸に対し英国の最大利益関係（Predominance）を明記して其攻撃を防ぎて如何と思と居り閣下の高見は如何

侯爵　日本の朝鮮に對スル利害関係は最も密接なるは自説トシテ之を明言シタルモ未タ其注意を惹キタル事なし今回帰国の節此事を明記アリ度キ事なり

[illegible]

外相　充分了解セリ又一私人の帰説なる事も亦知と居り而シテ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

又自分ノ云ヒシ事モ亦全ク同性質ニテ自分一個ノ説ナレバ申シタルベシ

侯爵　其他ヨリ自分ト閣下ノ間ニ如何ナル談話アリシヤ事ノ質問ニ

〜聴ハリ〜〜〜

侯爵　其事ニハ抑強セラレテ毫モ異存無キヨウニ思ハレタリ却テ自分ノ望ム所ナリ

外相　然リ

侯爵　尚ホ申シ置キ度ハ満洲ノ問題ナリ今日ニ於テ日本ハ単ニ生来埋ル限リ露国ノ側撃（時センヲ欲スルガ如キ傾向アレバ将来ニ於テハ或ハ干戈ニ訴フルニ那ラザレバ幸例ヲ為ンヲ逸ル能ハザル場合生ズルモモ知レズ如斯キ場合ニ遭遇セバ如何ニスベキヤニ就テハ豫メ貴意ヲ頼シ置カザル可カラズ

外相　右ノ問題ハ何人モ考ヘ居所ナレバ最日閣下ノ所説ノ如リ何分ニモ接シ居ル事トテ露国カ漸次実力ヲ台湾ニ及ボシ広ク得ザル所ナラン

侯爵　加之露国ハ鉄道ヲ有シ居レリ

外相　鉄道ノ事ニテ思ヒ出シタリ過日貴意ヲ得タル露英ノ鉄道ニ関スル協商ハ統ニ之ヲ公ニスヘキヨウ郵ケ之レヲ閣下ニ申渡シ致スベシ（別紙参照）

侯爵　サテ山海関間ノ鉄道ハ除外例ナリトシナラム

外相（為参考ノ要領ヲ渡ス）

侯爵　今日皇帝陛下ハ自分ヲ「サンドリンガム」宮ニ招キ入レベキ旨林公使マデ通知アリタル趣ナルガ閣下ハ亦タ知ラルカ

外相（意外ナルカ如キ風ニテ）否然ラバ最早ヤ明日申出ル故申述ス

侯爵　出発ノ準備ハ致セシモ陛下ノ御命令ナレバ謹テ服従致スベシ

外相　然ラバ此ノモ閣下ノ名ヲ出サズシテ其旨自分ヨリ奏上シテハ如何

那ケ閣下ハ陛下ノ御命令ハ能ク奉セラルベキ存念ナレバ自分ノ関ル所ニテハ閣下モ既ニ明日出発ノ準備ヲ致サレタル事ナレバ今日之ヲ変更セバ頗ル今後ノ計画ニ関係ヲ及スベシ如何ト注意申上テハ如何

都筑氏　其区巻ハ侯爵ヨリ致サレ難カルベシ

外相　然ル

其ヨリランスダウン侯ハ秘書官バークントン氏ヲ呼ビ種々内談ノ末「サンドリンガム」宮ニ宛テ発電ノ件後ニ及バレタルガ如シ

外相　在日本英人ノ永住権ハ関ル問題起ル度ニ閣下ニ御風知ナベキカ自分ハ件裁ノ形式ニ依ルテナリトモ之ヲ高著センヲ考案中ナリ之ハ軍ニ閣下ニ御論致スノミニ閣下ノ高見ヲ聞カント欲ス

那ケ

其ヨリ新渡ニ移リ午後七時辞ヲ公ニセラル

第五拾五號

林在英公使より伊藤侯爵宛電報

明治三十五年一月十五日於露国接電

一月十五日附小官より外務大臣に宛て発送致したる電報左の如し

第貳號

先電第壱號に関しランスダウン侯に一月拾四日小官に左の如き協約案を手渡せり

大不列顛國政府及日本國政府は偏に極東に於ける現状及全局の平和を維持するコトを希望し且清帝國及韓国三國の獨立と領土保全とを維持するコトを及該二國に於て各國の商工業をして均等の機會を得せしむるコトに関し特に利益関

係り有スル以ノ為ニ左ノ如ク約定セリ

第一條　両締約國ハ相互ニ清國及韓國ノ獨立ヲ承認シタルモノ故ニ以テ該二國就中ニ於テモ全然侵略的趨向ニ制セラルヽコトヲ聲明ス然レトモ日本國ハ有スル政治上其ニ關係上ノ特別ナル利益ニ就キ陛下ノ政府ノ注意ヲ喚起シ陛下ノ政府モ清帝國ニ於ケル大不列顛國ノ特別ナル利益ニ就キ同ヲ注意ヲ與ヘ両國政府ハ若シ右等利益ニシテ別國ノ侵略的行動ニ由リ侵迫セラルヽ場合ニハ両國就中該利益ヲ擁護スル為ノ必要欲ヲ(カラザル)措置ヲ執リ得ルコトヲ承認ス

第二條　日本政府ノ提議シタル協約草案第一條ニ同シ但シ「上記ノ利益」ヲ「上記各自ノ利益」ニ改ム

第三條　同上協約草案第二條ニ同シ

第四條　同上協約草案第三條ニ同シ

第五條　同上協約草案第四條ニ同シ但シ「役等ハ」ヲ「両國政府ハ」ニ改ム

第六條　本協約ハ調印ノ日ヨリ直チニ実施シ該期日ヨリ五箇年間効力ヲ有スルモノトス若シ上記期限ニ至ル以前ニ締約國ノ就中一方ヨリ意志ヲ通告セザル場合ニハ本協約ハ締約國ノ一方ガ廃止ノ意志ヲ表示シタル當日ヨリ一箇年ノ終了ニ至ル迄引續キ効力ヲ有スルモノトス然レトモ右終了ノ期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戦中ナル時ハ本同盟ハ講和成リ了ニ至ルマデ當然継續スルモノトス

右証據トシテ下名ハ各其政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ此ノ聲明ニ記名調印スルモノナリ

（不完）

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

伊藤侯爵

林董英公使より伊藤侯爵宛電報

明治三十五年一月十五日於羅馬接電

伊藤侯爵ノ後

両政府間ニ交換スベキ文書草案

幹路各自ノ政府ノ為メニ本日帰途致候協約ニ関シ大不列顛国政府（日本国政府）ニ平時ニ於テ大不列顛国（日本国）海軍ガ日本国（大不列顛国）海軍ト成ルヘク行動ヲ共ニスベキコトヲ承認シ且一国ノ軍艦ハ他ノ一国ノ港湾内ニ於ケル修繕又ハ石炭積入其他両国各自ノ海軍ノ隆盛又実力ニ影響スベキ便宜ハ相互ニ之ヲ与フヘキコトニ同意スル旨ヲ貴官ニ通告セラレタノ条ニ有レ中候日本国ト大不列顛国トハ各々現ニ極度

に於テ他ノ列三國ノ海軍ニ比シ優勢ナル海軍ヲ維持致候
大不列顛國（日本國）ハ生来恃ベキ限リ極東ノ水上ニ集中シ
ノ国ニ使シ得ベキ海軍力ヲ他ノ列三国ノ海軍力ニ比シテ常ニ優
勢ニ維持スルコトヲ忽ニスルノ意志無之候

敬具

31 五於七歸

伊藤侯爵ヨリ栗野公使宛電報

明治三十五年一月十六日於羅馬発電

貴下ハ倫敦ヨリ何等カノ報知ニ接シタルカ若シ然ラザレ
バ在英公使ニ問ハレヨ

（備考）當時栗野公使ハ露国赴任ノ途次巴里ニ滞
在中ナリ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

第六八號

栗野公使より伊藤侯爵宛電報

明治三十五年一月十八日於羅馬接電

小官ハ只今在英公使より外務大臣宛電報ノ寫ヲ受領セリ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

第五拾九號

栗野公使より伊藤侯爵宛電報

明治三十五年一月十八日於羅馬接電

小官ハ在英公使より外務大臣宛電報ノ寫ヲ受取りタリ之ハ来月ベクンバ各國民ニ對シ朝鮮ニ於テ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ関スル帝文ノ末段ヲ変更スルコト望ミ國アリ又第一條モ亦タ異存ヲ挟ムベキモノヽ如シ該條ハ清國ニ於ケル英國ノ地位ヲ恰モ朝鮮ニ於テ殊ニ要求スルヲ得ベキモノト同樣ヽ規定シタリ若シ假ヲニ日本ガ其ノ辭鞭ニ基キ朝鮮ニ於テ事行的政策ヲ施サンコトヲ主張スルコトアリトセバ支那ニ於テモ亦現ニ英國ト同樣最モ重大ニシテ且益々增進シツヽアル利益ヲ有スルニ拘ハラズ英國ニ亦退スルニ從ヒ於テ力ヲ及レノ朝鮮ニ於ケルト

同様ナル政策ヲ主張スルノ議制ヲ以テセザルベカラズ如斯ナル事情ナレバ貴下ガ何等カノ方法ニ依リ上記修文ヲ変更セシムル様子奨セラルルコト甚タ緊要ナリト認ム何等カノ措置ヲ執ルコトアラバ御一電ヲ乞フ

第六拾弐

栗野公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十五年一月二十日巳星発電

（本電報ハ在羅馬日本公使館ニ於テ通譯ノ上ヲリプルス ヘ郵送シタルモノニテ一月二十二日同地ニ於テ接受ス、尤モ譯文ハ在羅馬日本公使館ノ通譯シタル儘ナリ）

本官ノ電信ニ對シ外務大臣ヨリ只今接到セル返電ニ依レバ同大臣ハ元ヨリ内閣總理大臣ハ朝鮮問題ニ関シ露国ト協商スルコトヲ希望スル但シ本官ノ覺書ニ記セル意見ヲ容認スルハ一ノ取極メヲ締結スル為メ最終ノ命令ヲ與フルノ義ニアラズ之ヲ即チ本官ハ伯爵ニ赴キ約定ノ基礎ヲ見出ス為メ盡力スベキ旨命セラレタリ

本官ハ外務大臣ニ向ヒ果シテ露國ト協商スルノ意望アラハ假
令日英條約ニ基キ締結セラルヽニ至ルヽ其ノ会表ニ延延スルコト最
モ必要ナリト電報シ置キタリ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

伊藤博文文書

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 383